View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[翻訳] イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』 (1554年) (8)

その他のタイトル	[Ubersetzung] Jorg Wickram, Der jungen Knaben Spiegel (1554) Nr.8
著者	工藤 康弘, 田島 篤史, 吉田 瞳, 柴 亜矢子
雑誌名	独逸文學
巻	65
ページ	143-158
発行年	2021-03-20
URL	http://doi.org/10.32286/00023418

関西大学『独逸文学』第 65 号 2021 年 3 月

［翻訳］

イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554 年）（8）

工藤 康弘・田島 篤史・
吉田 瞳・柴 亜矢子訳

はじめに

本稿はイェルク・ヴィクラム（Jörg Wickram）の『少年の鑑』（*Der jungen Knaben Spiegel*, 1554）本文第十九章および第二十章の翻訳である[1]。本稿の共訳者である工藤と田島は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014 年 3 月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章から第十八章と作品・作者の解説は発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである[2]。なお 2018 年 3 月から吉田が、同年 4 月から柴が本研究会に参加しているため、本誌第 63 号から共訳者として加わっていることも付言する。

1　Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2　工藤康弘・田島篤史訳「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554 年）」、『関西大学西洋史論叢』第 17 号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014 年、20 － 32 ページ。同「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554 年）（2）」、『独逸文学』第 59 号、2015 年、231 － 241 ページ。同「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554 年）（3）」、『独逸文学』第 60 号、2016 年、101 － 114 ページ。同「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554 年）（4）」、『独逸文学』第 61 号、2017 年、133 － 143 ページ。同「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554 年）（5）」、『独逸文学』第 62 号、2018 年、33 － 44 ページ。工藤康弘・田島篤史・吉田瞳・柴亜矢子訳「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554 年）（6）、『独逸文学』第 63 号、2019 年、77 － 89 ページ。工藤康弘・田島篤史・柴亜矢子訳「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554 年）（7）、『独逸文学』第 64 号、2020 年、33 － 43 ページ。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ（Hans-Gert Roloff）の編纂によるヴィクラム全集を用いた[3]。またゲルトルート・ファウト（Gertrud Fauth）およびミヒャエル・ホルツィンガー（Michael Holzinger）による二冊の校訂版も参照した[4]。前者はヴィクラム研究の第一人者による校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は1903年のヨハンネス・ボルテ（Johannes Bolte）による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツィンガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツィンガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン国立図書館所蔵の初版テクストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した[5]。

なお原典には章番号もコンマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツィンガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。

3　Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3: Knaben Spiegel; Dialog vom ungeratnen Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert（Hrsg.）, Berlin: W. de Gruyter, 1968, S. 1-121.

4　Wickram, Jörg（Verfasser）, Gertrud Fauth（Hrsg.）: *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhafftige History von einem ungerahtnen Son*., Straßburg: Karl J. Trübner, 1917; Wickram, Georg（Verfasser）, Michael Holzinger（Hrsg.）: *Der jungen Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

5　http://daten.digitale-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/（2021年1月23日最終アクセス）。

第十九章
ある晩、手が縛られ首に縄がかけられたロタールが、まったく見るも哀れな姿でヴィルバルトの前に現れたこと。ロタールがヴィルバルトと話したこと。

ヴィルバルトは羊飼いの仕事を一生懸命学んで覚え、もはや親方に安い賃金で働かされなくなりました。親方は羊飼い仲間から立派な演奏家として尊敬されていました。とても上手にバグパイプを吹くことができたからです。善良なヴィルバルトは親方からバグパイプを教わりたいと心から望み、親方は快く手ほどきをしてくれました。ヴィルバルトはわずかな期間で、気品ある弦楽器の演奏では親方を追いこし始めたのです。そして彼は弦楽器を弾き、今度はバグパイプを吹き、それに合わせて上手に歌いました。彼にはまだわずかな教養が残っていて、しばしば自分の歌や詩句を作りました。とうとうヴィルバルトは才能を開花させて羊飼いの杖を手放し、バグパイプと歌だけで生計を立てるようになったのです。それは物乞いよりもほんの少しよいものでしたが、そんなに

大きな違いはありませんでした。しかし誰もそれを物乞いと言うべきではないでしょう。さもなければ弦楽器奏者やバグパイプ奏者が銀のバッジを持って城や街や宿屋を転々と渡り歩き、歌を歌い、弦楽器を弾き、バグパイプを吹き、口上することをひどく恥じなければならないでしょう。そのようなことをしたあとで演奏家たちは食卓の上におひねりを入れる皿を黙って置きます。人がくれたものを彼らは受け取ります。それは物乞いなんかではないのですが、いずれにせよ運まかせなのです。そういうわけで、こうしたことを善良なヴィルバルトも始めたのでした。

あるときヴィルバルトは座って、昼間にバグパイプを吹き鳴らしながら詩を作っていました。彼は自分の不運を洗いざらい歌い、とりわけあのロタールのことをひどく罵りました。というのも、ロタールがヴィルバルトを苦しめるあらゆる原因となっていたからです。彼の作った歌はしかるべきときに読者の皆さんが聞くことになるでしょう。

ヴィルバルトはその夜に家畜を連れて小屋に戻り、夕食後、疲れて床につきました。眠気に襲われて横になり、ほどなく眠ってしまいました。たちまち彼は、恐れおののいている人の姿が目の前に立っているのを見たような気がしました。その姿は体を小刻みに震わせ、おびえたように絶えずヴィルバルトに向かって言っていました。「ああ、フリートベルトよ、フリートベルトよ！ヴィルバルトよ、ヴィルバルトよ！」そのような痛ましい呼びかけによって、ヴィルバルトは夢の中でとても怖くなりました。彼は力強い声で、人殺し、と叫んだような気がしたのですが、実際には叫ぶことはできませんでした。しかしとうとう声が出て、彼は大きな声で叫びました。その声で彼は目を覚ますと、目を凝らし、幻影に向かって手を伸ばしましたが、しかしそこには何もありませんでした。彼はひどい冷や汗をかき、かなりびくびくして横になり、家畜を放牧するために、夜が明けてほしいと何度も願いました。そしてけっきょくもう一度深く眠り込んでしまいました。すると先ほどよりももっと恐ろしい幻影が、目の前にはっきりと現れたのです。夢の中で、ロタールの姿を目の前ではっきりと見ました。ロタールの両手は後ろで縛られ、長い縄が首に巻きつけられ、ひどくやつれ、死人のような顔をしていました。彼は弱々しく、しわがれた声で言いました。「ああヴィルバルトよ、ヴィルバルトよ！哀れな俺ロタール、俺がやらかした悪行

にどれだけひどい報いを受けたことか。何よりもまず、俺は愛する親父の言うことに従わなかった。窃盗、詐欺、欺瞞といった悪行三昧だった。ああ、しかしとうとう残念なことだが、極めて恥ずべきことに、刑吏の後についてちっぽけな絞首台まで行く羽目になり、そこで俺の身体はカラスのごちそうになってしまった。申し訳ないことに、俺はお前さんを父上から引き離し、今のひどい貧しい状態に貶めた。そのことでお前さんは俺を訴えて当然だ。しかし親愛なるヴィルバルトよ、俺の哀れな魂を鎮めるために、どうか俺に対する怒りを鎮めて、赦してほしい。」こう言って、その幻影は消えてしまいました。

ヴィルバルトは大きな驚きと恐怖で目を覚まし、おそるおそるあたりを見回しました。何も見えなかったので頭を毛布の中にうずめましたが、夜が明けるまで一睡もできませんでした。朝起きて、かばんや杖や角笛といった自分の道具をとってあちこち歩きました。そして下女たちに家畜を駆るようにと角笛を吹いて知らせました。

さてヴィルバルトは野原までやってくると、あの幻影のことをあれこれ考えました。「全能の神よ、いったいこんなことがあるのだろうか。僕が眠っているときに見たことが本当なら、ロタールは悲惨な最期を遂げた。彼の邪悪な心が自身をそそのかし、彼は哀れで惨めな僕ヴィルバルトを見捨てられた人間にした。しかし僕は今、異郷の地で羊飼いの杖で生計を立てているが、恥ずべき最もみじめな死を遂げねばならなかったか、あるいは死んでしまうよりはましで、親戚に対してもより誠実であろう。せめて僕の愛する父上、また同様に愛する母上にいつか会えるような日と時間が来て、ともに過ごせたらいいのだが。ああ、ぜいたくもせず、高慢な態度もとらず、父上、母上の一番身分の低い従者や下男でもいいからなりたいものだ。

よし主なる神に希望と慰めを求めよう。神さまは放蕩息子にもなさったように[6]、僕をお見捨てにならず、再び父上の家に連れていってくれることはわかっている。軽蔑すべき高慢な連中と財産を使い果たした僕は、放蕩息子そっくりだ。ああ、あの父親が息子を受け入れたように、

6 「ルカによる福音書」15 章 11 － 32 節参照。父親の財産を分けてもらった息子が旅先で放蕩の末に一文無しになったが、故郷に帰ると、父親に温かく迎え入れられた。

僕の父上も寛大な心でもって、裸同然で見捨てられた哀れな息子である僕を慈悲深く受け入れてくれたらいいのだが。でも父上はそう簡単に僕に情けをかけてはくれないだろう。なにしろ僕は父上の知らぬ間に彼の意志に反して出奔し、おまけに僕の誠実な傅役(もりやく)をあんなにひどく傷つけてしまったのだから。

さあ、一か八かやってみよう。父上が情けをもって僕を受け入れてくれたら、神さまに感謝しなければならない。神さまが僕を永遠の牢獄に入れたら、もっと大きな罪を背負ったことになる。しかし自由に生きながらみすぼらしい生活をし続けるよりは、神さまが僕の大きな悪事を赦してくれるよう、父上のもとで牢獄に捕らわれながら生涯を終えよう。僕が父上の情けを受けられないままであるなら、どのようにして神さまに対して永遠に申し開きをしようか。というのも神さまはモーセの第四の戒律を守らせようとし、父と母を敬うように命じているからだ[7]。だから僕は、何よりも神の怒りに触れたあげく、自分の哀れな魂を永遠の牢獄へもっていって、かたに取られるよりは、父上に対して当然の報いとしての罰に身をゆだねるほうがいい。」

善良なヴィルバルトはそうした考えを幾度となく昼も夜もめぐらせたすえ、親方にいとまを告げようと思いました。彼は親方のところへ来て二年目に入っていました。今やいくらかの報酬も得て、それを使って故郷へ帰ろうと考えていました。

ある日親方がヴィルバルトのところへやってきて、この先も自分のもとで働いてくれと言いました。ヴィルバルトは、故郷に帰るつもりだという自分の最終的な計画を親方に伝えました。またその際、どのようにして不幸な目に遭い、多くの財産を浪費したか、出自と名前はなんであるか、要するに、自分に起きた一切がっさいの出来事を親方に語ったのでした。それを聞いて羊飼いはたいそう驚きました。ヴィルバルトは本来すらっとした容姿の若者で、一人でいるとたいへん品行方正でもあったので、羊飼いは、このことはまったくありえぬ話ではないだろう、と十分に見てとれたのでした。彼はヴィルバルトの望みに対して穏やかに

7 「出エジプト記」20章に、いわゆるモーセの十戒が出てくる。「父母を敬うこと」は読み方によって第四とも第五とも解釈されるが、『少年の鑑』では第四の戒律としている。

答えて言いました。「我が親愛なるヴィルバルトよ、俺はお前の幸福を邪魔しようとは思わない。お前がそのような家の出であったことを知っていたなら、こんな野蛮な仕事に就かせるべきではなかった。だからお前は俺たちの町で親父さんのことをよく知る貴族を見つけるといいだろう。俺がお前のことを必要としたように、そのお方たちがお前のことを快く迎えてくれて、立派な仕事に就けてくれるだろう。」ヴィルバルトは言いました。「親愛なる親方、僕はあなたの下男として途方もないほど楽しかったということを、どうか信じてください。あなたが僕を苦難の中から拾いあげてくれたんです。そうでなければ、どうなっていたかわかりません。このことに大いに感謝しています。神さま、ありがとうございます。」羊飼いの親方は、ヴィルバルトに給金を払いました。ヴィルバルトはバグパイプを取って、親方や下女たちを祝福しました。

ヴィルバルトはドブリンから船でヴィール川を越え、ウラディスラヴィアという名の大きな町に来ました。そこには多くの領主がいました。ヴィルバルトはできる限りバグパイプに専念しました。彼が宿屋に入ると、すぐさま「尊敬」されました。これは弦楽器を演奏させないためだったのですが、というのもヴィルバルトの弦楽器演奏はひどくみすぼらしいものだったため、分別をもって聴いていられる者など誰もいなかったからです。それでもバグパイプは彼にとってしばしば十分な価値がありました。ヴィルバルトがたまたま食堂に行くと、彼は下男や馬丁のところに座るように言われました。馬丁たちはヴィルバルトのことをあざけりました。そしてヴィルバルトは、自分が何者で、どの両親から生まれたのかを考えると悲しくなってきて、次のように考えました。「ああ神さま。僕が父上と傅役に従っていたなら、誰の道化にもおどけ者にもなっていなかっただろう。そして今でも立派な主君のもとで食卓についていただろうし、僕に仕えるはずの下男と従者を従えていただろう。だけど今ではちっぽけな盾持ちの道化だ。」このことはまだどこの宮廷にもみられる慣習です。そう、田舎貴族の館でも、またそうでない領主のもとでもみられます。神さまはおよそ哀れで敬虔で純真な人をお助けになります。その結果、誠実な人は領主にあざけられたり馬鹿にされずにいます。ですがそういう人は太鼓持ちやごますり屋とはうまくいきません。「若い騎士は老いて物乞い、若いコックは老いて見習い」と

よく言われますが、こうしたごますり屋たちは、このように考えることはほとんどありません。しかしそれでもしばしばこのあざけり屋の愚か者たちは、鈴を打ち鳴らします[8]。そうしてあらゆる鈴が鳴りはじめ、愚か者は自分がよくものを知っていると言って回るのです。それは置いておきましょう。

第二十章
ウラディスラヴィアの町では大きな議会が開かれ、フリートベルトとフェーリクスが主人の代理人としてその地に遣わされたこと。ヴィルバルトは、彼らが宿泊している宿にたまたまやって来て、食卓の前でバグパイプを伴奏に歌ったこと。フリートベルトがヴィルバルトに、バグパイプなしでもう一度歌だけを歌ってくれるように頼み、ヴィルバルトが彼の意に従ったこと。

運命がある人を没落させようとすると、その人はもはや高みにはいられず、どん底に突き落とされます。また運命がある人を出世させようとすれば、その人はそれほど深く泥の中にいることはできません。運命がその人を深い泥の中から抜け出すのを助けてやることができるのです。読者の皆さんが聞くことになるように、善良なヴィルバルトにもこれから同じようなことが起こるでしょう。

あるとき、ウラディスラヴィアで権威ある領邦議会が開かれました。そこへ騎士団長がフリートベルトとフェーリクスの二人を代理人として遣わしました。彼らが長いあいだ滞在していると、ある日、ほかの偉大な諸侯や使者たちと楽しく食卓を囲むことになりました。そこに善良でしがない流しの男がバグパイプを持ってやってきて、自作の歌を歌いました。その男はフリートベルトやフェーリクスのことに気づきませんでしたし、また彼らもその男がヴィルバルトだとわかりませんでしたが、彼の歌詞には気を留めました。さて彼がバグパイプを吹き終えると、フ

8　当時、鈴は阿呆（道化）の象徴でもあった。例えば、Narrenkappe と呼ばれる帽子には決まって鈴がつけられていて、演劇においても阿呆（道化）を表す衣装の一つであった。

リートベルトが言いました。「親愛なる流し君、この歌は誰かから習ったのかい、それとも自分で作った歌なのかい。」ヴィルバルトは答えました。「ああ、親愛なるご主人さま、この歌詞で私が歌っていることを信じてください。これらすべてと、さらにもっとひどいことが私の身に起こりました。かれこれ十年以上も、大きな不幸の中をさまよっていたのですから。私は小さいときから、そして育てられた後でも、石ころさえもが私を憐れんだでしょう。私は自分がかわいい子供だったことをはっきりと覚えています。決して悪いことはできませんでした。私のことを叱ってくれたり、罰したてくれたりする人のことを私の母は憎みました。しかしそのことが大きく役立ったわけではなく、私は不幸な目に遭い、ずっとその状況にいたのです。

フリートベルトは言いました。「親愛なる流し君、君はどこから来たんだい。」ヴィルバルトは彼に答えました。「ああ、親愛なるご主人さま！私から言うことはできません。というのも、両親が私のことを恥じるに違いないでしょうから。」フリートベルトは言います。「私たちに君

の歌をもう一度歌ってくれないか。そうすれば私とこの素晴らしい御仁から君に敬意が表され、それを大きな謝礼として受け取ることだろう。」フェーリクスもまたその歌をとても聴きたいと思いました。そこでヴィルバルトは自分のことをもっとよく理解してもらうために、バグパイプなしで、高らかに響きわたる美声で歌い始めました。ヴィルバルトは自分だと気づかれないように、名前を変えていましたが、しかしこの歌の冒頭やたくさんの箇所に自分の名前を散りばめて作っていました。この点に彼ら二人は特に注目しました。というのも、その外見からは決してヴィルバルトだとわからなかったからです。このときヴィルバルトは「よい」生活を送っていたので、それほどまでに青白く、日焼けをし、やせてしまっていたのです。彼は「絶望のハインツ（ハインツ・オントロースト）」と名乗っていました。そこに二人は、彼が自分の名前を隠していることを見てとりました。しかし二人のどちらもヴィルバルトに気づいた素振りを見せませんでした。ヴィルバルトもあの二人がこれほど身分が高く、名望のある人になったとはまったく考えませんでした。というのも、彼らが素朴で、貧しく、教養のない両親から生まれていたことをもとより知っていたからです。求めれば得られ、努力すれば成功するなんて思ってもいませんでした。

ヴィルバルトが自身の歌を歌う。

今すぐここで歌にしよう[9]
僕の身に起こったことを
皆にもそれが起こりうる
つまりは僕の一味に加わり
誰に従うこともなく
労（いたわ）ろうともせぬことが
でも運命は意地の悪そな目つきして
大きな「財産」与えてくれる

9　原文では Will bald hie singen ein gedicht / wie mir beschicht となっており、冒頭の二語がヴィルバルトを暗示している。この表現はところどころ現われる。

かような者には悪意に満ちた貧苦でもって

その男、すぐにお山の大将なりたがり
派手に持ち金つぎ込むが
その財産は長くはもたず
飲み食い、博打で身上つぶし
快楽求め
のんべえ、ごろつきたちといる
あいつらひどく破廉恥で、遠慮も何もありゃしない
博打三昧、ぜいたく三昧
憂いなしの牛飲馬食がやつらのやり方

しまいには、僕はすぐに財産ほしがり
ごろつきたちは卑劣にも
略奪、盗みをし始める
やつらいつかは報いを受けて
お縄か、刑吏か、はたまた剣で
とてもやさしく懲らしめられる
もう遅い、正しい助言に従うのには
とうにそれから逃げていて
やつらの計画みな失敗

さて若い僕も同じ目に遭った
ならず者[10]についていき
それが僕を悔やませる
父や多くの人たちの
教えを僕は無駄にした
心から僕を案じてくれたのに
僕は皆から遠くへ逃げた
軽やかなのはあっという間

10　ならず者。原文の Lottar は人名であるが、本来は先の Will bald と同じく、Lotter（ならず者）からロタールをほのめかす意図があると思われる。

工藤 康弘・田島 篤史・吉田 瞳・柴 亜矢子訳

僕の財産なくなれば、皆は相手にしてくれぬ

すぐに店主に追い出され
僕は貧苦の只中で
時を過ごさにゃならなくなった
学も技術も知識も軽んじ
ひたすらぜいたくしまくった
しまいに他のこと覚えにゃならず
牛飼い、豚飼いやる羽目に
固パン求めて汗水たらし
なんとか生計立てられた

霜、雨、風と雪のなか
幾度も僕は苦しんで
何度も凍死を覚悟した
革の袋と豚飼いの杖
これが僕の全財産
こいつでもって飾らにゃならぬ
夜の寝床は藁布団
僕の晩酌澄んだ水
かのならず者、僕をこんなにしやがった

せめて父の寵愛を
受けることができたなら
この苦しみを喜び耐えよう
ああ父の屋敷で
最期まで
召使いでいられれば
神さまにはそのように
すぐに助けてくださいと、それ以外はお願いしない
そうでなければもう僕は、破滅するほかないだろう

今すぐに我が主が助けてくだされば
ほんの短いあいだでも
父のところにいるつもり
父がやさしく慈悲深く
心の中でいるように
どうか神さまはからい給へ
そしたら僕はそのように
必ず振る舞うことだろう
ロタールがヴィルバルト[11]を誘惑せぬように

終わり

さて宰相フリートベルトとフェーリクスがヴィルバルトの歌を最初から最後まで聴くと、そこにいるのがヴィルバルト本人だということに、もはや疑いの余地がありませんでした。そのため二人はとても涙をこらえることができませんでした。彼らはその善良なバグパイプ奏者を自身の食卓へ招き、好きなだけ大いに食べて飲むように言いました。ヴィルバルトはいたく感謝して受け入れました。しかしなぜこの二人のすぐれた男たちが、その目立たないバグパイプ奏者をこれほどまで気にかけているのか、食卓にいる他の人の誰にもわかりませんでした。フリートベルトはヴィルバルトを見つめるたび、心から重いため息をついていました。他の諸侯はこれを何度も目にしていましたが、誰も彼に尋ねようとしませんでした。ヴィルバルトはといえば、フリートベルトのことは気にも留めていませんでした。なにしろ彼は飲み食いに夢中でしたから。

さて食事が終わると、フリートベルトとフェーリクスは立ち上がり、バグパイプ奏者を金細工師のもとへ連れていきました。そして、二つの美しい銀の盾を作り、彼ら二人の紋章をそこに鋳出すよう、金細工師に注文しました。フリートベルトとフェーリクスは、二人がウラディスラヴィアに滞在するあいだ、自分たちに仕えるようヴィルバルトに命じま

11　ここで初めて Will bald ではなく Willbald と人名を使っている。これに伴い Lottar も「ならず者」ではなく人名として訳した。

した。二人ともヴィルバルトに貧しい思いをさせたくありませんでした。そして、ヴィルバルトが二人の故郷へ来ることを承知するなら、彼に名誉ある仕事を与えたい、あるいは援助したい、と伝えました。ヴィルバルトは心底これを気に入りました。しかし彼は、二人がどこへ自分を連れていこうとしているのか知りませんでした。

ヴィルバルトは毎日フリートベルトとフェーリクスのもとに通い、たいへん忠実に仕えました。というのも、彼がブラバントにて若殿でいたとき以来、食事がこれほど問題でなくなったことはなかったからです。ヴィルバルトの人当たり良く熱心な仕事ぶりに、フリートベルトとフェーリクスはいくら驚いても足りないくらいでした。そしてしばしば口を揃えて、まったく父親のもとにいたときよりも、ボースナを離れているあいだの方が、ヴィルバルトは良い傅役と教師に恵まれたんだなぁとか、貧乏というものは本当に甘やかされ思いあがった子供を懲らしめるのに良い師匠であるとか、今は亡きヴィルバルトの母があんなにも甘やかさなければ、彼は決してこんなことにはならなかっただろう、などと言いました。二人は、ヴィルバルトが母の死を知っているかどうか、とても知りたがっていました。しかし、彼らはこのことについて踏み込まない術を心得ていました。というのも読者の皆さんがいずれ知ることになる通り、来たるべき時が来るまでヴィルバルトが二人に気づくことを、両者は望んでいなかったからです。

フリートベルトとフェーリクスは、二人揃ってすべての仕事から解放され時間があるときに、ヴィルバルトを金細工師のもとに連れていき、彼のために盾を買い与え、彼がそれらを身につけたがるか試そうとしました。ああ神さま、この善良で哀れな貧乏人は、今やその気高さをまったく忘れ去っていました。誰かがヴィルバルトに道化の帽子を被せようとすれば、彼は進んでそれを身につけたでしょう。それほど貧乏や不安、災いがヴィルバルトを飾り立てていたのでした。

ヴィルバルトが盾をつけると、フリートベルトとフェーリクスは、彼を緑地にある市門へと連れていき、気を遣いながらも彼を問いただしました。しかしヴィルバルトからは何も聞き出せませんでした。ただ彼は二人に、自分がいかなる境遇にあったかを始めから、つまり貧困と羞恥のせいでアントワープから逃げ出さねばならなくなったところから語り

ました。当初、彼はたいそうなぜいたくをしていましたが、しまいには店主にほとんど代金を支払えなくなりました。ヴィルバルトが彼らに、自身が被った不幸について長々と話すと、フリートベルトが口を開きました。「数週間前に、とある貴人が私たちの宿にいらっしゃった。その方は素敵な笑話と物語で、しばしば我々の無聊を慰めてくださった。私の記憶が正しければ、その方はボースナの宮廷にいらっしゃる。その貴人がお話くださった数々の物語のなかに、ある騎士の息子の物語があった。それが哀れなバグパイプ奏者であるお前の物語と似ている。もしお前がくだんの騎士の息子と同じ名前を持つならば、騎士の息子とはきっとお前のことだと思う。」ヴィルバルトは心から大きなため息をつき、「ご主人さま」と言いました。「もしよろしければ、私にその物語をお話ください。そうすれば自分より哀れな鳥がいることがわかります。」しかしヴィルバルトがその物語を聞きたがったのは、それが他の人の話ではなかったからです。というのも彼は、フリートベルトの言葉すべてから、彼の言う育ちの良い騎士の息子とは、まさしく自分のことだと気づいたからです。ヴィルバルトはただひそかに、自分の出奔後、父母がどうしているか知りたかったのです。

フリートベルトにとって、この男がまさに自分が話そうとしているヴィルバルトであることに、もはや疑いの余地はありませんでした。それで彼は言いました。「バグパイプ奏者よ、聞いてくれ。くだんの貴人の話によると、ボースナの町にゴットリープという名の騎士で、騎士団長の宮廷に仕えるやんごとなき御仁が住んでおられる。その方は高齢になってから美しく、淑やかで高貴な女性をめとり、彼女とのあいだに一人息子をもうけられた。そしてヴィルバルトと名づけ、大きな愛情をもって育てられた。その老騎士はある農夫からもらいうけていた幼い少年に息子の相手をさせ、一人の傅役をつけて等しく一生懸命育てられた。

二人は傅役のもとで同じように徳を身につけたが、少年ヴィルバルトは一人の悪い誘惑者についていくようになり、父親と傅役の懲らしめもどこ吹く風と無視した。息子がひどく身を持ち崩すのを見た父親は、とうとう傅役にもっと厳しく罰を与えるように命じた。ヴィルバルトがあつかましくて悪い仲間のもとにいるのを見た傅役は、思い切って鞭で懲らしめようとした。しかし悪い仲間にうまくそそのかされたヴィルバル

トは、そのような罰を受け入れようとせず、ナイフで傅役の太ももを刺し、ひどい傷を負わせた。そのようなわけでヴィルバルトは二度と父親の前に現れようとしなかった。（誠実な両親から生まれたのに）札つきの盗人のような悪たれである一人の仲間とともに、ヴィルバルトはその場を立ち去った。

ヴィルバルトはボースナの町から遠くないところで、ある主人のもとに滞在していた。そこで彼は母親から多額のお金を送ってもらっていたが、さらに旅を続け、しまいには母親と連絡がつかなくなった。しかし息子を甘やかしたことで、父親から何度も叱られたのに加え、息子と連絡をとれなくなった母親はひどく心を痛めて命にかかわる病気になり、その後まもなく亡くなった。しかし騎士はまだ自分の家で、先に述べた息子の仲間と暮らしているそうで、今やその息子の仲間には若く美しく裕福な妻がいるらしい。しかしヴィルバルトが国のどこにいるのか、父親は知るよしもない。お前を見ているとヴィルバルトを思い出す。というのも、おそらくヴィルバルトはお前と同じくらい悲しい気持ちでいるだろうから。」

こう言って宰相フリートベルトは話を終えました。ヴィルバルトのほうはというと、何度も心の底から深く重いため息をつきました。そしてとりわけ愛する母親の死を聞いたとき、彼はもはや涙をこらえることができませんでした。しかし気丈にもことを急がず、ただ次のように言いました。「母親が亡くなる原因となったその息子さんを、神さまお赦しください。しかし私は本当に自分の母親のことがとても心配です。」

しかし時間が経てば経つほど、ヴィルバルトが素性を明かそうとしないのをフリートベルトとフェーリクスが見て取ると、彼らは町にある自分たちの宿に戻り、二人だけで広間に座り、どうしたらヴィルバルトをボースナに連れていけるかを話し合いました。フリートベルトは言いました。「もしヴィルバルトが自分がふるさとにいることを知ったら、きっと父親に会わせる顔がないと言い出すのではないか。だから町から二、三マイルまで近づいたら、大きな策を弄して夜に行くことにしよう。門のところに来たら、夜だが開けてもらおう。そうしたら彼といっしょに我らが姑の家に行く。そこなら彼もわからないだろう。」このように二人は決めたのでした。